

避難の丘

薄葉

茂 宮城

一日中机に向かつてゐる妻を冬の日ざしのなかに連れだす  
親のこと仕事のこと日が暮れるわれらの日常どこまで続く  
海沿ひの集落跡に陽のさして何を食むやら冬の鶺鴒  
十二年たてば荒れ野も老若の憩ふ芝生の園まどとなりたり  
鶺鴒は不意に飛び立ち海望むへ避難の丘の方へ消えゆく

墨の香

吉田 紘子 埼玉

急逝の友を悼みて籠もりぬし汝は僧衣に着替へいでゆく  
仏教をかくも尊ぶ能楽をおほかたの僧侶気づかずにゐる  
知らぬまに雨降りいでし秋の夜磨る墨の香にふはりつつまる  
ひもすがら孫の弾きぬしフレーズが何してゐても脳裏をめぐる  
亡き父の袴二重に折りこみて夫謡ひ出づ「卒都婆小町」を

こないだまでは

片岡 絢 神奈川

入院中まいにち覗く売店のお菓子の陳列棚、二巡する  
ドレーンの針が刺さつてゐる箇所がちゆうんちゆうんとずうつと痛い  
いきるつてつらい。私のことばではなかつたんだよこないだまでは  
ドレーンがやうやく抜けて病棟の廊下の奥の雲までゆける  
シャンゼリゼ通りみたいに病棟の廊下を歩く、歩く、嬉しく

ガザの惨

佐藤

玄 神奈川

対立の種を蒔きにし者らありパレスチナ、イスラエルの陰に  
マルトリの連鎖思はる熱病に取り憑かれたるとき進攻  
柵のなか戦火に追はれ飲み水に食に窮せる民二百万  
一地区を猛攻、占領するとても武装組織はおそらく消えず  
ガザの惨を生きし少年またの日にハマスの戦闘員とならんか

鼻のてりてり

岩崎 佑太 東京

晩秋のぎんなんの道亡き父の足音はいつもわれを追ひ抜く  
ゆふやけのきれいな老人ホームです祖父母のゆきし終の栖は  
亡き父よ祖父母よ来ませゆく年の今夜の鍋が多すぎるから  
師走の街やばいやばいと馳けてゆく男子児童のこゑのあかるし  
歳晩の電飾の街闊歩する黒柴犬の鼻のてりてり

折り鶴

真島 陽子\* 新潟

語るよりなお心地良き時間かなわが子と二人折り鶴を折る  
まだ秋のつづきのような陽の射せば癒える気がするわが子の病  
ゆれうごくこころは秘めて勤めおり辞めると決めて慰留待つわれ  
山盛りの海老天井にみずみずとすりおろされた山葵が旨い  
あおによし奈良のうたびとうま酒に酔いて楽しげ電話のむこう

冬の手紙

三 浦 陽 子 長 野

湯豆腐の湯気に眼鏡をくもらせて豆腐をすくふ無防備な夜  
ヒーターの延長ボタンを押してからゆつくりと書く冬の手紙を  
デザートのやうに味はふものがたりヒロインは古いアパートに住む  
冬の音を聴くためだけの揺り椅子を心に置いてときどき揺らす  
背になじむ揺り椅子はないかわたくしが消えたる後もときどき揺れる

冬至の宵

今 井 由美子 岐 阜

透きとほる晩秋の陽を溜めてゐる庭の木椅子に落葉が坐る  
むらさきの艶めきさらに極めつつムラサキシキブに降る秋時雨  
足裏<sup>あしうら</sup>まで染まりてしまふやも知れぬ緋色もみぢをゆふべ踏みゆく  
ヒアルロン酸ナトリウムふたしづく注せば拡がるわたしの湖<sup>うみ</sup>は  
ふぞろひの柚子玉あまた浮かしつ指遊ばす冬至の宵を

キンモクセイ

鷺 巢 錦 司 静 岡

長く病む友の電話の明るくてしばしたのしも相憐みつ  
見せむとし妻を呼べども遅かりき叢雲に入るビッグムーンは  
キンモクセイわが家と隣りと一斉に咲きて香りの合唱聞こゆ  
生り年の柿の実妻と取りをれば枝うれしげに秋空に振る  
何十年身につきてゐしルーティンがある日ゆゑなく崩れゐるなり

風の合図

吉田美奈子 愛知

石段を上りつめれば視野あふれもみぢの寺はもみぢひといろ  
落葉へと落葉散り継ぐ足らざるを補ふごとく色をかさねて  
公孫樹散り蝶になりたき一枚が風の合図を待ちてはためく  
航跡雲ほどけゆく空青深くそより冬が噴き出してゐる  
冬薔薇の花びらの中に隠れゐる毛虫はおやゆび姫の裔なる

固いはちみつ

康哲 虎\* 兵庫 庫

G A C K Tにもローランドにもなれなくて一円切手に口づけをする  
輪の外で静かに僕は若者の伸びやかな笑い声を楽しむ  
銀色のフォークでつぶす温かい湯にせずませた固いはちみつ  
間違った生き方でした五時間の輸血を終えて夜空を歩く  
聞き上手になって減らしてあげたいな死にたい気持の回路をひとつ

りんごジュース

久保田 智栄子 広島

玄関にあふむきてゐる大カマキリ指を出だせばしがみつきけり  
霜月の陽が照りつける草のうへカマキリのうへ撒水をせり  
ランタンのやうにジュースの瓶並ぶラベルにりんごの赤灯されて  
雪しづり解くるごと心身満たされぬ津軽平野のりんごジュースに  
子の家のものほし竿につるされた破れかぶれのパンダの手拭ひ

